

# 昭和24年 ～ 29年

1949～1954



大西旅館と屋根付き橋



新築の「山の家」と探勝客

## きのうから「面河山の家」を開放

電灯も風呂もある

面河ヒュッテ「山の家」が完成した——学生や一般山の愛好者が僅かの費用で石鎚や面河溪を探勝できよう——と元北予中学教官中川愛美氏(四五) Ⅱ上浮穴郡面河村若山Ⅱが県下高校、登山会、新聞社など各種団体百二十余の後援で建設を始めてから三カ月、面河溪関門前カリヤロに、建坪二十坪余り平屋建てで、四十名を楽に収容できる立派な「山の家」が出来上がり、十月二十五日から正式に利用者に開放した。

炊事場から便所、電灯もつき、真新しい畳に、木の香りが心持ちよく天上に組まれた丸太を仰ぎ、すぐ足もとに響く溪流が紅葉の山にこだまするのを聞きながら、秋の面河の情緒に浸ろうという野趣豊かな「ヒュッテ」である。

建設費は十六万円で、中川氏が私費を投じているが、電灯などは四配が無料で取りつけ工事を行うなど、各種団体の賛同で完成した。このヒュッテは本県観光界の代表的景勝地、石鎚山、面河溪を訪れる人々に利用される。新築のヒュッテは夜具、入浴料などすべて合算して、一泊五十円の維持費を支払えばよい。主食持参の場合は夕、朝食付で百円という格安のもの。

中川氏談 金つまりの時代に高い旅館代を支払っては、いくら面河でも観光客が減る。完成した山の家は一般ハイカーたちだけでなく、中、高校生の理科、社会科の研修場としても開放したい。予算があればもっと拡張したいが、今年の紅葉の秋は取りあえずここを最大限に利用してもらいたい。

(昭和24年10月26日)

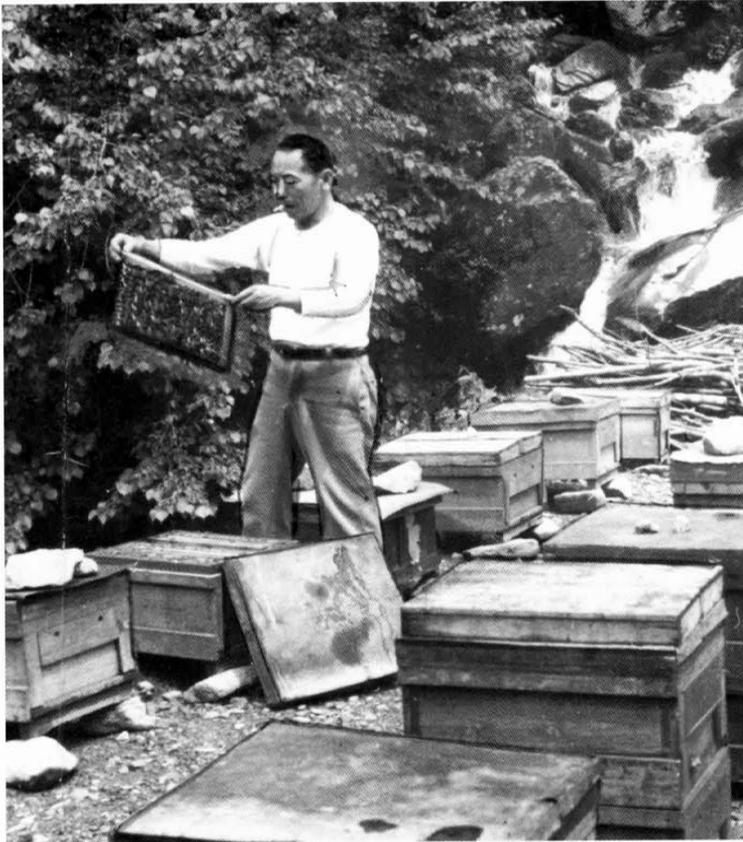
## 面河に高山植物や生物の研究所

誰にでもできる自然観察

学生や登山客がわずかの費用で探勝や登山ができるようにと建設されている、景勝地面河のヒュッテ(山の家)には、上浮穴郡面河村中川愛美氏の提唱で、本年度から山岳研究所が設けられ、居ながらにして高山植物を研究できるように一方所に植えつけられている。

また県果樹試験場長薬師寺清司氏の巖父和三郎氏の指導で、大森林の開花と蜜蜂の活動状態を観察できるほか、植物、生物の研究が誰にでもできるようになっている。なおこのヒュッテは登山者や各種団体など、本県はもとより高知県からの利用者も多く、夏季利用割当表を作って混雑の緩和に乗り出している。

(昭和26年7月7日)



蜜蜂の活動状態を研究する薬師寺氏

## 清流も工事でサツパリ

夏だより面河三題

石鍾登山を兼ねた学生などによって、名勝亀腹の上手蓬菜溪にはキャンプの群れがそこそこみられる。テント小屋から飯ごうをさげて夕餉の準備に清流へ下るベレー帽の学生、スック靴にズボンのいでたちという女性の姿が、キャンプ村の雰囲気をかきたてている。

完成を急ぐ観光道路工事のうち、予定されていた関門入り口の第一トンネルは、地盤の関係で貫通を取りやめ、これに代わっての切り取り工事が行われている。断がい数百尺の峡谷には、電気削岩機が煙のような岩粉を飛ばしながら、岩石によって清流も河原となる始末。このため美観を誇った関門入り口もすっかり様相を変え、納涼客を寂しがらせている。

下界の梅、桃、ナシなどの花が散ると、栗やハゼの花の蜜を求めて、無数の蜜蜂が高原の上浮穴へ移動してくる。関門入り口に並ぶ巣箱にも、避暑を兼ねた人たちがみられる。

(昭和29年7月29日)



キャンプする人たち

## 上浮穴の秋祭り終わる

霜ふんで「ワッショイ」

県下の秋祭りのしんがりを受けて、上浮穴郡面河村の秋祭りは、さる十六日の前組祭から始まり、中組祭の二十四日まで一週間各集落で行われたが、秋祭りとは名のみで、すでに名勝面河溪のモミジはすっかり落ち、青々と伸びた麦畑もすっかり冬景色。稲木のとうきびが赤く朝日に映えるころ、霜の真つ白く降りたお宮から、神輿をかい、何里も離れた集落から集落に担ぎ込んでいった。まことのどかな山国の冬祭り風景。

(昭和27年11月27日)



ねり歩く神輿

## 大イノシシに馬乗り

3人がかりで仕止める

仁田四郎現代版という狩猟のシーズンに耳寄りな話——。十二月一日午後二時半ごろ、上浮穴郡面河村面河溪から約十町ほど山懐に入った猿ヶ谷のジャガイモ畑で、子供三匹を連れた大猪を、狩猟中の同村関門、旅館業中川安市さん(六)、同村若山、菅熊吉さん(三)、同菅房幸さん(三)の三人が見つけ、ズドンと三斉射撃をしたところ、見事一発が腹部に命中したが、くだんの手負い猪は子供を連れて、ドロンと茂みの中に隠れてしまった。

早速、中川さんらは三人で手分けして雑木林の中を探していたところ、突然「ウオーツ」と手負い猪が茂みの中から飛び出て突っかかってきた。驚いて三人は枝にぶらさがって難を避けようとしたが、手をすべらせた中川さんが猪の上に落ちて馬乗りとなり、今様仁田四郎となって大格闘。



射止めた大猪を囲んだ中川さんら3人

結局、菅さんらが接近して猪の頭部に至近弾を一発ズドンとかまし、やっと大猪を射止めることができた。中川さんは両手に軽い裂傷を受けたが、大猪は何と二十貫もあり、その夜、地区の人が集めて、猪肉料理を作って舌鼓を打ち、冒険談に花を咲かせた。

(昭和29年12月12日夕刊)

涼線レンズ 面河のイワタケ採り

# 岩肌に流す冷や汗

ロープ一本に命託す

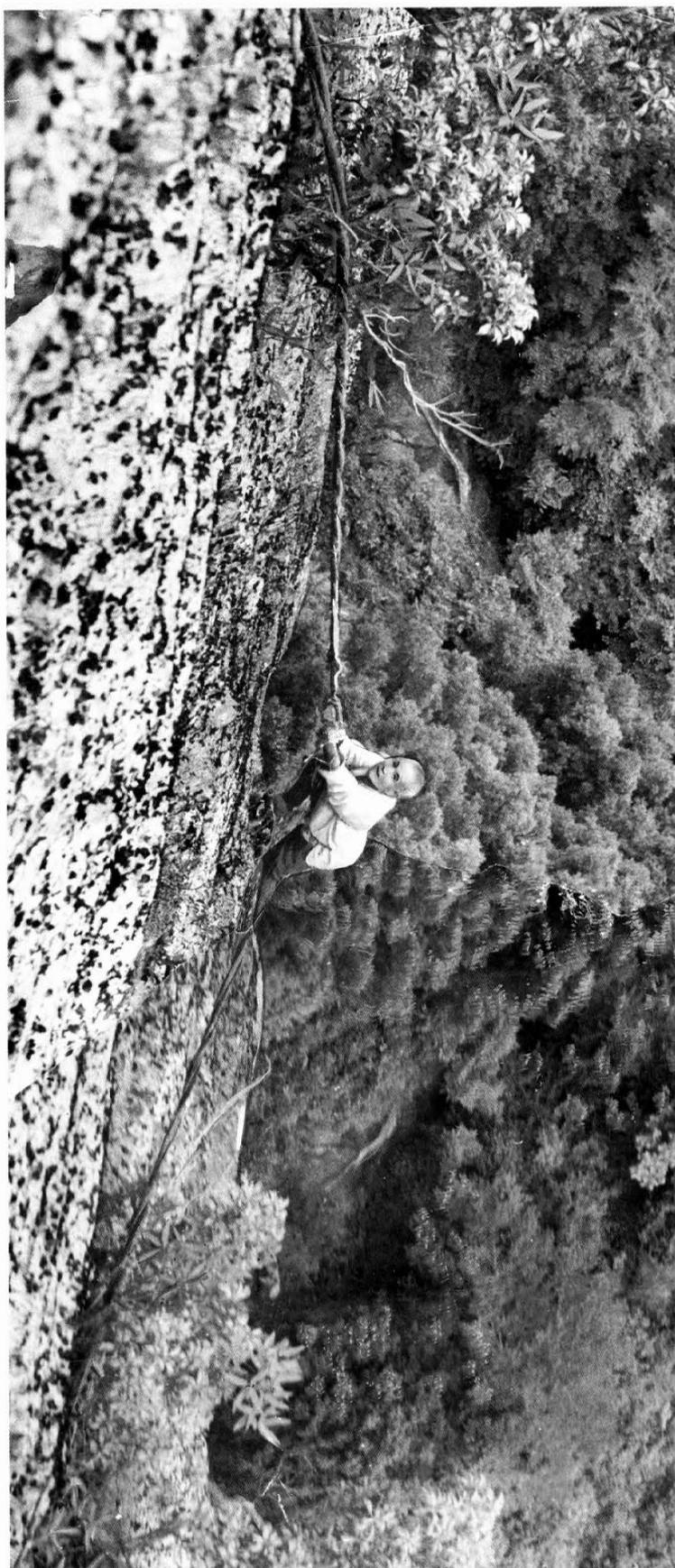
面河地方の名物「イワタケ採り」は、ロープ一本に命を託して数千丈の絶壁を降り、包丁一つで採取する、まさに命懸けの仕事。下界は千古の密林、上から見下ろすと、数百年を経た杉がノコギリの歯のように林立している。ロープが切れたらもちろん最後。それだけにスリルは満点。気温二十度前後という深山でのイワタケ採りは、涼しさを通り越して冷や汗が出るほどだ。

このイワタケは、高さ数千丈の岩壁にのみ寄生する植物で、雨後の岩面の湿っているときに採らなければならない。いつごろから食用に珍重され始めたかは定かではないが、もの本によると、明治の初期にはすでに面河探勝客の食

膳ぜんに供している。

イワタケは生育が遅く、大人の手くらいの大きさで危険な仕事だけに、現在イワタケ採りは、面河村若山の大江留太郎さん(八)ただ一人。二十七の年から五十四年間イワタケ採りを専門にしている。頂上の大木にロープを結んで、スリルと絶壁の岩肌を猿のような身軽さで降りる。下界の暑さをよそに、スリル満点のイワタケ採りはまさに暑さ知らずである。大江さんは面河村の岩川峰帯にかけて、降りたことのない絶壁はないと語っている。

(昭和29年8月18日)



ロープ1本に命を託して採取する大江さん



流量調査の様子

## 動き出した道前道後水利開発計画 ダム建設の瀬ぶみ

県、面河水系の調査開始

三十二億の巨費と五年の年月をかけて、五万二千キロワットの発電と地耕二万町歩を潤す道前道後平野水利開発総合計画は、六月早々、農林省、岡山農地事務局、県耕地課の合同調査の実施にまで発展しているが、県耕地課ではその受け入れ態勢を整えるため、田内技師の二行が五月二十九日、関門を振り出しに関係地区の流量、雨量調査、地形測量を開始した。

まず流量、雨量の調査は流水計、雨量計を設置し一定期間中の流量、雨量を調べ、これによりダムの規模を決める。現在のところ関門ダムは、名勝面河溪にある二つの川の合流点鉢巻岩、想思溪の付近に高さ六メートルのせきを設け、流域三千二百二十七畝の水を集める予定。また地形測量は関門―大成間三千六百メートルのトンネルにも六メートルのせきを設け、流域二千二百五十八畝の水を集める。大成―杣野間二千八百五十メートルのトンネル、杣野―妙間トンネルにも六メートルのせきを設け、九百八十二畝の水を集める。杣野―友田間七百メートルのトンネルに高さ五十五メートル、幅百二十一メートルのせきをつくるほか、この地区千六百七十畝から集めた水も合わせて、千八百万トンの一大ダムを建設する計画の資料とするもの。(昭和26年6月1日)